

金沢藩に禄仕の三宅復一について

寺 畑 喜 朔

拾石被下置候上三等上士江御指加相成申候同月十一日権
少属被仰付英学教師相勤罷在申候 右私由緒如斯御座
候以上

三宅秀（復一）の事蹟に関する資料は多数あるが、金沢藩英学校における語学教師として禄仕していた頃の事情は殆んど知られていない。今回、加越能時報（明治二十一年創刊）を検索中、三宅の口述筆記による「旧金沢藩英学校の沿革」（二〇五号、明治四十）、「余が英語学修の順序と加州藩に禄仕始末の概略」（二〇七〜二二二号、明治四十）を見つけ、その間の去就が明らかとなった。

まず、金沢藩へ提出した明治三年十月の三宅自筆の由緒書を示す（金沢市立図書館蔵）

本国備前、生国武蔵

三宅復一有実

私儀慶応三年九月六日於金沢御雇被仰付翻譯方江出仕罷

在候辰年十一月洋学教授役塾所御用加被仰付候已年四月

十九日英学三等教師被仰付同年五月改而被召出新知百三

金沢藩への禄仕の動機は、さきに横浜の米医 A. Vedder が三宅に長州藩へ出仕をすすめたが（慶応三年春）、「実際幕府からも話があつて外国方へ出仕せぬかと勧誘があつたのです、しかし父は何故か此方を嫌つて居りまして或は幕政の衰徳を見て居るゆへか自分も幕府へは仕へなかつたのです。それで幕府の方は謝絶しました、他の大藩の内で奉公を求めて居りました。夫れは御国（注、加賀）と薩藩とであつたのです、処が父の親友に福田兵四郎敬業と云ふ人がありまして、父とは年来至て親しく交際して居りました、此人が予て加賀藩へ召出され居りまして私がヴェツデルへ対して長州行きを断りました折り丁度藩の御用で御国へ赴く際であつたから、兎に角福田に附けて加賀へ遣ると云ふことにして、父は私一身を福田に托しました」（二〇八号）

「此年は明治維新の前年慶応三丁卯の歳である私は是迄日本内地の旅をしたことがないから至極結構だと云ふ訳

で、福田に附て御国へ往きました。丁度英国船が七尾へ来航して此処に上陸した時でありました、實際私共が七尾へ出向く前に（開港拒否のため）英国船は出帆して仕舞ったのでありました、夫れで七尾の御用はなくなりましたが、金沢へ着くと、直く御傭になつて壮猶館の翻譯方へ編入せられました、身分は町奉行の支配で、最初は二十五人扶持を賜はりました、此時は慶応三年丁卯九月六日である、処が差当り急な御用もなかつたから、地理研究と云ふ名目で東海道廻りを為て其年十月父へも対面の為め、一旦江戸へ歸ることになりました」（二〇九号）

慶応四年、幕府の洋書調所では算作麟祥らが英学教授に必要な教科書などを英国留学中の菊地大六、外山正一らに命じて買入れさせた、ところが、「其書籍が丁度江戸へ着した時分には徳川幕府瓦解の後であるから幕府の側では不用になつて居るのみならず、書籍の代金も支払が出来ない、外国方の田辺が非常に心配して私の父に相談をしに来られた、夫れで私が書目を一覽すると英文読本文法書地理書算術書代數幾何書歴史字典類何れも三四十部づつあつて価も頗る廉価であるから直接御客方へ申出して、残らず夫

れを御買上げの事になりました、慶応義塾の福沢氏の方でも非常に欲がつて居りましたが、私の申込みが先にあつた為悉く御国の方へ廻ることになりました、価は確か四百両許だつたと覚へます、茲で学校を開く為の書籍も凶らず揃ひましたから早々金沢へ赴任する筈でありましたが春以來父が病氣に罹りましたので横浜のヘボン先生に診療を受け且病氣養生を同地で致し居りましたので私も附添看護を致し一日一日と赴任延期を願がつて居ります内、病父を江戸へ伴れ歸りました上野の戦争の頃は病氣益々重態となり終に不歸の客となりました、夫れで中陰を仕舞ふてから御国へ行くことになりました」（二〇九号）

三宅は着任して（壮猶館→致遠館）、壮猶館の翻譯方と協議して、画期的な「英学校之規定」（内容は略す）を作成し、学習の実をあげた。そして、

「私は母病氣看護の為め、暫時の御暇を願つて明治三年の春東京へ歸つた、其時誰れか代員を拵へなければならぬので、慶応義塾の福沢氏に迫つて適當の人を求めた、すると福沢氏が長野桂次郎氏を勧めた、此人は私が曾て正則語学の教を受けし所の人だから、私は大に喜んで、自分が尊

敬する先生が、私の代りに往つて呉れるなら其様な結構な事はないと云ふて、即ち同氏を御国へ紹介して彼の地に留めてある自分の家財雑具は悉皆同氏へ贈ることにした」
(二〇五号)

上京後、三宅は二カ月余り藩兵（築地）の隊付医者をも命じられ、明治三年三月大学出仕の運びとなった。

（金沢医科大学）

山本 徳子

十七・八世紀の長崎における 中国人医師たちについて

十七・八世紀の長崎における医学を言う場合、まず、掲げられるのは、いわゆる南蛮医学・オランダ医学であろう。たしかに、当時の日本医学にとって、それらの医学は注目すべきものであつたらう。では、それまでの中国医学は、どこへ行ったのであろうか。大庭脩教授によれば、「長崎情緒とはオランダ情緒と人は言うが、実は、長崎の異国情緒は中国情緒である。」といわれている。「医学」と「情緒」とは一緒に論じられるものではないが、この見解も一理あるものと思われる。その長崎に來航していた中国人医師たちの活躍についての研究は、従来、あまり取りあげられることがなかったように解せられる。しかし、近年、着目されつつある。すなわち、戸出一郎博士の『王寧宇五雲子伝』および潘吉星教授の『日中医学交流史の中の